男女共同参画センター

活躍する女性を訪ねて【第10回】

さまざまな分野で活躍する佐賀県在住の女性に
前アバンセ館長の村上文（あや）がインタビューしました

NPO法人唐津環境防災推進機構KANNE（カンネ）（唐津市）

事務局長　藤田　和歌子 さん

● プロフィール ●

（ふじた・わかこ）
平成18年、NPO法人唐津環境防災推進機構KANNEの設立と同時に事務局員となる。
自然環境・防災に関するイベントの実施や、地域環境団体のネットワークづくりなどに携わり、出前講座では講師としても活躍している。
平成21年に事務局長に就任。
現在はパートタイム勤務者を含む5名の職員とともに、虹の松原の再生・保全活動を初め、さまざまな地域活動を支援している。

（インタビュー：平成26年7月）

活動は偶然の出会いから

「KANNE」という名前には、2つの意味が込められています。1つ目は、唐津に伝わる民話の「勘右衛（かんね）さん」のように皆さんに親しまれる会になるようにという願いです。かんねさんは「吉四六（きっちょむ）さん」のように、とんちが利く方だったそうです。例えば、「（唐津市の）鏡山は世界一高い山。名前のようにかがんでいるから今は低いけど、立ったら世界一高い山・・・」というようなお年寄りからお子さんにも親しまれる「とんち話」がたくさん残っています。もうひとつの意味は「環境ネットワーク」の略です。唐津市内にたくさんある環境団体とネットワークを構築し、ネットワークの核となり、唐津市の環境保全活動をリードしていくという想いが込められています。

この会の活動にかかわるようになったのは本当に偶然でした。大学を卒業して地元に戻っていた私は、ある日、地球温暖化に関する講演会に参加しました。卒業した年の冬のことです。その時の講師が後にKANNEの理事長となられる方で、都会で働いた後に唐津に戻り、「何か地域に貢献したい」と、いろんなことに取り組まれている方でした。その講演会の後で質問をしていたら、「環境系のNPO法人を立ち上げようとしているので、もしよかったら事務局をしてみないか」と誘われたのです。ちょうど法人化の手続きなどが始まっていた頃でした。その時の私は仕事に就いていなかったし、活動への興味もありました。「いいきっかけかもしれない」と思って飛び込んだのが始まりです。

もともと自然環境には興味を持っていました。高校の時のクラブ活動は「気象部」でした。星を見たり、文化祭で台所用品のステンレスボールに穴を開けてプラネタリウムを手作りし、上映したりすることに惹かれて入部しました。名前は「気象部」でしたが、当時の先輩たちは主に天文の活動をなさっていたので、ほとんど「天文部」のようでした。大学は理学部に進み、地質学を専攻しました。「自分が住んでいる地球のことをもっと知りたい」という単純な興味からです。地質学といっても鉱物や火山などいろんな分野がありますが、私は生まれ育ったこの土地がどのように形成されたのかを知りたくて、地層から昔の環境を紐解く分野を学びました。

「白砂青松」はなぜ消えたのか

今から約400年前の江戸時代に、唐津藩の初代藩主が田んぼを潮や風から守るために松を植えさせたことが虹の松原の始まりとされています。松原の本来の姿は「白砂青松」と呼ばれるように「白い砂地と青々と元気な松」の姿です。昔は松葉をかまどの燃料として使っていました。そのため地域の人たちが常に落ちた松葉を集めに来て

いたので、虹の松原は「白い砂地」で「青々と元気な松」の状態が保たれていました。松原は、私たちの暮らしを守ると同時に、人の生活とのかかわりの中で守り育まれてきました。

ところが、燃料革命以降、人々のライフスタイルが変化して、松葉は燃料として使われなくなりました。すると、松原の中には落ちた松葉がどんどん溜まっていきます。この溜まった松葉が原因で土が肥えてしまい、松原に草が生えてきたり、松ではない木が育ったりします。こうして、松以外の木が松よりも大きくなってしまうと、肝心の松に光が当たらなくなり、やがて松は枯れてしまいます。このような状態が続くとそのうち松原はなくなってしまいますから、私たちは元のように人々と松原が関わりをもった「白砂青松」の虹の松原を取り戻すために、ボランティアを募って松葉かきをしたり、草を抜いたりして白い砂地の姿に戻す活動をしているのです。

それから、「松露（しょうろ）」をご存知でしょうか。見た目は小さなジャガイモのようなキノコで、シャキシャキとした歯ごたえが特徴的と言われています。「東洋のトリュフ」とも呼ばれていて、昔は料亭のお吸い物などにも入れられていたようです。アカマツに付くキノコが松茸で、虹の松原にあるクロマツにはこの松露というキノコが付きます。昔は、カゴいっぱいすぐに採れていたと言われていますが、現在では幻のキノコと言われるほど見かけることが少なくなり、若い世代にはもう知っている人があまりいないくらいです。

落ちた松葉が溜まって土が肥えるということは、松にとって良いことのように思えますが、他の植物にとっても良い環境になってしまうのです。松原に草や木が育って“草ぼうぼう”の状態になってしまうと、別の菌が入り込んでくるので松露は生きていけなくなります。松露と松は共生していますから、松露がなくなると松は水分やミネラルをもらうことができません。松露が出るということは松が元気だという証拠だそうです。そのためには「白砂青松」でなければなりません。だから私たちは、松葉かきや除草に取り組んで、松露が生え、人々に親しまれる白砂青松の松原を目指しています。

また、近年問題になっている“松枯れ”はマツ材線虫病という伝染病です。マツノマダラカミキリという昆虫が松の新芽をかじる時に、おなかの中にいたマツノザイセンチュウという線虫が松の木の中に入っていきます。すると松の木の内部で次第に線虫が増えていき、やがて松は水分が吸い上げられなくなって枯れていきます。さらに、マツノマダラカミキリは枯れた松の木に卵を産みます。そのサナギに線虫が付いた状態になって、やがて元気な松の木へと飛び立っていきます。こうして病気が広がっていくのです。

これらを防ぐために虹の松原で行われていることは、マツノマダラカミキリを殺すための薬剤を空中散布することや、マツノザイセンチュウの松の内部での移動・増殖を阻止して松を守る薬剤の樹幹注入、それから枯れてしまった松の木を探して切り倒し、処分することです。また、直径2センチ以上の枝にはマツノマダラカミキリの幼虫が生息していることがあると言われているので、ボランティアでもできる活動として枯れ枝拾いをしています。

6千人のボランティアに支えられて

インタビューは唐津市役所の近くにあるKANNEの事務所で行った。質問に答える藤田さんの横で、ずっと寄り添うように立っていたのは「虹松まもるくん」という松の木のキャラクターだ。この大きなマスコットのおかげでさまざまなイベントから声が掛かり、虹の松原の再生・保全活動をより広く知らせることが可能になっているという。

ボランティアの募集活動は、基本的に1か所ずつアポを取って訪問し、「虹の松原を守る活動に参加してください」と趣旨などを含めて話をさせていただいています。虹の松原を守るための松葉かきや除草作業をするボランティアには約6千人が登録してくださっています。活動の参加方法は2つあります。1つ目は、申し込みが不要で、気軽に参加していただける「虹の松原クリーン大作戦　Keep　Pine　Project」を年に4回開催しています。2つ目は、松原の中の一定の区画を受け持っていただき、自分たちの好きな時間に活動していただくもので、「アダプト（里親）制度」と呼んでいます。

アダプト制度の1区画は100メートル四方あり、とても広いので、1区画の中にたくさんの団体や個人の方に入っていただいたり、さらに小さく区分けしたりして無理のない範囲で活動していただいています。町内会や企業、サークルや友達同士など、どんな形でも登録していただけます。活動する場所は最初に相談をしていただきます。「駐車場やトイレが近いところがいい」とよく言われるので、そうしたところから離れた場所には、どうしても人手が入りにくくなってしまっています。虹の松原は面積が220ヘクタールあります。アダプト制度で登録し活動していただいているところは、全体の面積の2割程度です。

松原の再生・保全活動は、自治体などで構成されている「虹の松原保護対策協議会」からの委託で行っています。ボランティア参加者には保険料などの自己負担は一切ありません。軍手や活動に必要な道具などはすべて揃っていますから、活動できる服装で、タオルと飲み物だけを持ってきていただければよいです。活動には3歳以下の

小さなお子さんも参加していただいています。松ぼっくりを拾うことも虹の松原を守るための大切な活動のひとつですから、「松ぼっくりをいっぱい集めよう」と声を掛けると、みんな一所懸命に拾ってくれます。ボランティアの皆さんからの「楽しかった」、「来てよかった」、「達成感があった」という声は本当に嬉しいし、活動の中で一番の喜びです。また、なんといっても賛同して一緒に活動していただいている6千人以上の虹の松原を愛する仲間がいることが励みで、自慢で、誇りです。

企業や自治体も活動をバックアップ

こんな活動ができるのは、企業や自治体など、いろんな方々の協力があるからです。例えば、アサヒビール（株）には、対象商品の売上1本につき1円が自然環境の保護・保全活動などに寄附される「『うまい！を明日へ！』プロジェクト」という取り組みがあります。また、（株）伊藤園では「お～いお茶『お茶で日本を美しく。』キャンペーン」が実施されていて、売上の一部が地域の環境保全などのために寄附されています。地元の宮島醤油(株)でもこのような取り組みが始まりました。どの寄附金も、直接KANNEに入るわけではないのですが、虹の松原の再生・保全活動に役立てられていて、活動に必要なほうきなどの道具を購入したり、活動のPRに使われたりしています。

これらの企業のキャンペーンは、広報の面でも非常に助かっています。虹の松原の写真付きのポスターを、飲食店をはじめとして至るところに貼ってくださるのです。「これからキャンペーンを始めます」というものや、「寄附金がこれだけ集まりました」などというポスターです。活動時に飲み物を提供していただくこともあります。これらの大きなプロジェクトにつながったのは行政の方々の働き掛けもありました。また、自動販売機の売上の一部がCSO※に寄附される、佐賀県の「CSO支援自販機」では、KANNEにたくさんの寄附金をいただいています。本当に多方面からの温かいご支援があるからこそ、この活動は成り立っていると思っています。

予想外の「人と向き合う仕事」

ここで働き始める前は、なんとなく「自然環境と向き合うような仕事かな？」と思っていましたが、実際は全く違いました。自然と向き合っているのは2割ぐらいで、ほとんどは人と向き合う仕事だったのです。行政でも、企業でも、どんな人たちにもネットワークをつなげられるということが、私たちNPOの役割なのだとようやく分かってきたところです。最初は「私たちが頑張らなくては」という感じでしたが、最近は「縁の下の力持ちにならなければ」と思うようになりました。

これからのKANNEは、組織としてもっと強くなっていかなければなりません。運営費の確保は大きな課題のひとつです。毎年1千トンも落ちる松葉や、マツ材線虫病で毎年約300本も切り倒されている松の木を再利用して、何か商品化できないかと検討を重ねています。皆さんからは、まだ「サークルの延長だろう」と言われてしまうのですが、虹の松原の再生・保全活動は、たとえ私たちがいなくなったとしても、ちゃんと回っていくようにしていかなければなりません。もともと松原は人々の生活との関係の中で守り、育まれてきたものです。この現代の生活の中で、どういう形で取り戻すのか、まだ試行錯誤の段階です。

写真：松葉が入った袋は松原の一角に積み上げられている

虹の松原は「地域の宝」

「虹の松原の再生」は佐賀県の政策（佐賀県総合計画2011の重点項目）のひとつとして挙げられていますが、ご存知の方は少なく、営業をしていて「どうして虹の松原の活動にうちが？」と言われた時に、松原の意義とあわせて「県の政策としても取り上げられています」という話をすると、「そうなんだ」と納得される方がいらっしゃいます。地域の宝である虹の松原を継承していくためには、地域、企業、行政が連携を図り、一体となって取り組むことが重要だと感じています。

「NPO法人唐津環境防災推進機構KANNE」は、平成24年度の全国森林レクレーション協会主催の「第25回森林レクレーション地域美化活動コンクール」で林野庁長官賞を受賞している。また、平成25年度には佐賀県緑化功労者（団体の部）、平成26年度には環境保全分野の県政功労者として表彰されている。

これらの表彰は、環境保全の面だけではなく、地域のいろんな人たちと一緒になって活動していることを評価していただけたのだと思っています。今年で活動は9年目になりました。初めの頃は、電話口で「NPO法人・・・」と言った時点で「うちはいらない」などと言われて、電話を切られることもありました。NPO法人自体がだんだん社会に浸透してきて、話を聞いてもらえるようになった部分もあると思いますが、「かんねさんね」とすんなり話を聞いてもらえることも増えました。でも、「そんな活動知らなかった」と言われることも多いです。広報はまだ足りないと感じています。今後ともこの輪をどんどん大きくしていきたいと思っています。

同じ唐津市でも、虹の松原から離れている相知町に住んでいる私は、この仕事に就くまで松原の現状を全く知りませんでした。「ああ、松原ってあるよね」というくらいの存在でしかなかったのです。でも、歴史的な背景を知った今では、虹の松原をうまく活用しながら未来永劫に守っていかなければならないところだと思っています。虹の松原は「唐津のシンボル」であり、「地域の宝」です。

松のトンネルのようになっている県道347号線を、日々の生活道として、または観光として通ったことはあっても、松原の中に入って散策したことはない人が多いと思います。「なかなか車を降りてまでは入りづらい」場所だとよく言われますが、ぜひ中に入って散策していただきたいですね。私も最初はあまり興味がありませんでしたが、もともと植物は好きだったので、毎回いろんな発見があります。そこに行くと元気になるような、本当に素敵な場所だと思っています。皆さんにも虹の松原のよさをもっと知っていただきたいし、松原の中でいろんな楽しみを見つけていただきたいです。

注）CSO：Civil Society Organizations（市民社会組織）の略。NPO法人、市民活動・ボランティア団体に限らず、自治会、婦人会、老人会、PTAといった組織・団体も含めて「CSO」と呼称している。

インタビューを終えて

藤田さんは若々しく、お嬢さんといった雰囲気ですが、NPO法人唐津環境防災推進機構KANNEの事務局長を堅実に務めるしっかりした方です。

自然環境に興味があり、偶然の出会いからこの仕事に就きました。自然環境と向き合う仕事かと思ったら、予想に反して、ほとんどが人と向き合う仕事でした。虹の松原の再生・保全のためには、松葉かきなどを行ってくれるボランティアを募集する必要があり、そのために1か所ずつアポを取って訪問し、協力をお願いする「営業」を行います。また、活動を継続するためには組織の強化、資金確保が必要です。そのため、行政や企業に支援を要請し、ネットワークを広げていきます。これらはまさしく人と向き合い、人を巻き込んでいく活動です。

実際に、約6千人のボランティアの登録と行政や企業の支援を得ていますが、努力の成果といえるでしょう。また、ネットワークを広げるにあたって広報の重要性も強調しています。「虹の松原の再生」が県の政策の一つに掲げられていることが「営業」に役だっており、企業のキャンペーンによって、
活動自体のPRになり、寄付金で軍手やほうきなど道具を買うこともできる
と感謝しています。

初めは「私たちが頑張らなくては」という感じだったのが、「縁の下の力持ちにならなければ」と思うようになりました。この発想の転換がすばらしいです。自分たちだけが頑張るのではなく、活動の意義や地元の人たちの努力を幅広くアピールし、理解と支持を広げることにより、効果が何倍にも大きくなっていくことが考えられます。KANNEは、森林レクレーション地域美化活動コンクールで林野庁長官賞を受賞し、県からも緑化功労者として表彰を受けていますが、これらの表彰は、環境保全の面だけでなく、地域のいろいろな人たちと一緒になって活動していることを評価されたと思うとのことです。

こうした取り組みは、多くの人の支援を得てNPO活動を実施する好事例として、大いに参考になるものと思われます。

アバンセ館長　村上　文

« 戻る

このページの上部へ

アバンセ 佐賀県立男女共同参画センター 佐賀県立生涯学習センター

アクセス・交通機関のご案内

お問い合わせ/ご意見・ご要望

アバンセ
佐賀県立男女共同参画センター・佐賀県立生涯学習センター

〒840-0815
佐賀県佐賀市天神三丁目2-11(どんどんどんの森内)
TEL:0952-26-0011　FAX:0952-25-5591
【指定管理者】公益財団法人 佐賀県女性と生涯学習財団

Copyright (C) 2011 Avance All rights reserved

開館時間

火曜～土曜日:8時30分～22時00分
日曜・祝日:8時30分～17時00分
(ホールは22時00分まで)

休館日

毎週月曜日(祝日も含む)
12月29日から翌年1月3日まで